



蜜滴りし月の世

柔らかな陽の光が、朝靄をかき分けて私の瞳に届く。ベッド脇のテーブルに置かれた時計の針は、5時を指す。確か、今日は休暇だったはず。もう少し寝ようかと思ったとき、1つの違和感が私を襲う。

自分の胴体に回っている腕は誰のものだということ。私の頭は、どうやら正常に動いていないらしい。自分の身に起こった異変に気づかなかったのだから。

どうやら自分の腕も錆びたらしい、再教育をしなければ。ただ、私のその思考すら氷付かせる者を見てしまった。

どうしてこうなったのだろう。

私の知らぬ部屋、私の知らぬベッド、

私の知らぬ外の日差し。

されど唯一知っているのは、私の横で穏やかな顔をして眠っている男だけ。思わず服の有無と、腰の具合を確認したのは許して欲しい。それほどまでに私は動揺していたのだ。正直、叫ばなかったことを褒めて欲しいくらい。

ああ、どうしてこうなった。だが久々に、これほど穏やかに眠り起きたのだ。私はいったい……。

「う、ん??もう少し寝なさい。」

低い弦楽器のような声が響く。ああ、この声を私はよく知っている。これはもう認めなくてはいけない。

私の隣に眠っているのは、

「エーリッヒ・フォン・レルゲン」だと。

比較的胃の調子がいい、先ほどゼートゥーア閣下から、秋津島皇国の土産だとチョコレートを頂いた。秋津島皇国でチョコ??あの国で知られている甘味は、あずき、わさんぼん??そんなものだったはず。

釈然とはしないが、閣下から頂いたもの謹んで頂こう。正直言つてはならないとは思うが、あの言葉を言った時の閣下の悪い顔が忘れられない。

「ああ、そうだレルゲン大佐。この土産はデグレチャフ中佐と食べるように。ではな。」

思い返しても、何故か寒気が・・・。

あの方は何を考えてられるのだろうか。昔あった、北洋艦隊との合同訓練のちライン戦線へ転属の辞令を私に伝える時に言った言葉もそうだ。

「気心の知れた貴官、

「世話焼きと呼ぶにはあまりにも個人的な助言」

極めつけは、

「貴官は、彼女と結婚の話をしたことがあるそうじゃないか。戦争が終われば結婚を考えると。そして、彼女に対して終わる頃には年頃ではと。」

誰だ、この方にそんな話を吹き込んだのは。いや、確かにそんな話はしたのである。それでも、それでもだろう。事あるごとに閣下方は、私とやつを会わせたがる。

最悪極まる・・・。

そのせいで、私の胃痛は一向に改善されない。数か月前から自分の胃を労るために、慣れぬ自炊をするようになったと言うのに。

「はぁ・・・。」

思わす溜息を付いてしまった。

ただ、彼女に対して思うところもあるのだ。苦手というわけではない。外見と内面がチグハグな彼女。小さな身体、美しい容姿にそぐわぬ知識と達観。戦争を望んでいると思



鳥籠に横たわるモノ

私の家には、黄色い美しい金糸雀^{カナリヤ}がいる。鈴のような声で囀り、私の耳を楽しませるのだ。

彼女の言葉は、その思想は、私にとって未知の領域。だが、私はそれらの要素に惹かれて家に置いているわけではない。その口から紡がれる音に、その美しい黄色い羽に、その美しい瞳に。私は心奪われたのではない。

私が心奪われたのは、彼女のその生き方だ。

歯を食意地ばり、血が出るほど拳を握りしめ、キツ！と前を睨みつけ、神などいないと声高らかに叫ぶその姿に惹かれたのだ。私の持たない強さを、私が選ばなかった物を。そう、彼女は持っていた。同仕様もない嫉妬、何故お前がとも言える敵意、その才や奢らぬ心を私は恨んだ。

だがそれ以上に私を苛立たせ、蝕んだのは彼女に対して無関心になれないこと。

何故、私が決定的に嫌える要素を持っていないのだ。
何故、こうも私は彼女から目を離せないのだ。

どうして……………。

私が伸ばした手を掴み、小さく微笑んだ彼女を懷に収めるのにはそう時間はかからなかった。

大事な大事な私の黄色い金糸雀。

もう空を飛べぬお前は、

その羽根を折った張本人と過ごして何を思う。

言えぬ懺悔^{ざんげ}の言葉を、

私は今日も君の銀翼突撃章に音無く投げるのだ。

すまない、本当に済まない。それでも、それでも私は君がいなくなる可能性が高いところに君を置きたくなかったのだ。君がその体に、赤や白い花を咲かすことになったら私は正気でいられないんだ。

だから、だから。

私は君から光を大空を奪いその羽根を折った。

君が絶望する姿、表情を私は見たかったのだ。空を、戦争を、戦いを切望する君からそれらを奪い。生暖かいぬるま湯に浸した瞬間の、激痛に叫ぶ君を見たかった。君の心に裂傷や火傷を負わせ、その傷跡を指でたどりたいと。

そんな歪んだ感情が私を満たす。

君は私が殺し、私が生かし、私が傷つけ私が癒すのだ。

私が与えた傷と君が今までに負った傷を、

私は癒やしたい。

君に残る傷跡は、全て私が塗り替える。

だから傷ついた君の傷跡に、私は弟切草^{オトギリソウ}を塗ろう。

私の思いが伝わるように、ゆつくりと。

私にもぎ取った羽の傷跡と、

君が生きた証に手を這わすのだ。

君から全てを奪い取り、その欠けた器を私という存在で埋め尽くせば、私は満たされるのだろうか。

それとも、君の全てを私のものとしたら。

その思考も、心も、体も、私のものにしたらこの渇きは満たされるのだろうか。

私のこの行動自体が、はじめから間違いだっただろうか。

今ではもうなにもわからない。